

古代エジプト新王国時代の棺に関する一考察 —ブラックタイプからイエロータイプへの変遷—

市橋 絵理*

A Consideration on Coffins in New Kingdom:
Their Transition from Black Type to Yellow Type

Eri ICHIHASHI*

[要旨]

本稿は、新王国時代の棺の変遷の中においてブラックタイプの棺からイエロータイプの棺への変化の要因をアマルナ時代の美術様式による影響に求めるものである。

新王国時代の棺は、ホワイトタイプ、ブラックタイプ、イエロータイプの3つに分類されている。ここで筆者は、ブラックタイプからイエロータイプへの装飾における変化が極端であることに注目した。イエロータイプの棺には新しい特徴がいくつも現れており、それまで使用されてきた棺とは特徴が異なる。そうであるにも関わらず、先行研究では、この極端な変化については触れられてこなかった。

簡素なブラックタイプから、豊富な装飾をもつイエロータイプへと極端に変化する直前の時代、つまりアマルナ時代において、棺の特徴に新たな変化が生じたのではないであろうか。イエロータイプは、アマルナ時代の美術様式の影響を受け、発生した新しい棺であると筆者は考えた。

本稿では、人物描写の変化、プレアマルナ時代からポストアマルナ時代までの棺の特徴、そして壁画装飾の変遷の3点から、イエロータイプの発生にはアマルナ時代の美術様式が関係している可能性を示したい。

1 はじめに

古代エジプト新王国時代の棺はホワイトタイプ、ブラックタイプ、イエロータイプと変化していく。ホワイトタイプとブラックタイプの棺の特徴においては類似点が見られ、棺の発展の過程がうかがえる。一方で、ブラックタイプからイエロータイプへの棺の変化はあまりに極端であると筆者には思われる。

そうであるにも関わらず、この変化の要因については、明確には述べられてこなかった。ブラックタイプからイエロータイプの間にあるアマルナ時代の棺について、詳しく取りあげられてこなかったためである。棺の変遷研究を行うテイラー氏 (J. H. Taylor) は、アマルナ時代の棺の特徴に大きな変化は見られないと述べている¹。本稿では、これまで詳しく考察が行われてこなかった、ブラックタイプからイエロータイプへの変化の過程を明らかにし、その変化をアマルナ時代の美術様式と一体的に考察することを目的としている。

「2 新王国時代の棺の変遷——棺の形態と色彩に基づいて——」では、新王国時代における棺の形態や色彩の変遷について示す。ホワイトタイプ、ブラックタイプ、イエロータイプの各特徴をふまえ、イエロー

* 関西大学大学院文学研究科博士課程前期課程 (Graduate School of Letters, Kansai University, Japan)

1 J. H. Taylor, "Patterns of Colouring on Ancient Egyptian Coffins from the New Kingdom to the Twenty-sixth Dynasty: An Overview," *Colour and Painting in Ancient Egypt* (London, 2001), p.169.

タイプの棺はアマルナ時代の美術様式を取り入れて発生した新しい棺であることを検証していく。

「3 人物の表現様式の変遷——人物スタイルと衣服に基づいて——」では、装飾の一部である人物描写の変遷について取りあげる。人物描写については、人物のスタイルと衣服の変化に着目した。棺の形態と色彩の変化は美術様式の変化であり、それは装飾の一部である人物描写にも影響していると考えている。

「4 ブラックタイプからイエロータイプへの変化の過程」では、「2 新王国時代の棺の変遷——棺の形態と色彩に基づいて——」で述べた形態と色彩に基づいた棺の変遷と、「3 人物の表現様式の変遷——人物スタイルと衣服に基づいて——」で示した人物描写が変化する時期が一致することに注目した。人物描写の変化と共に、棺の形態や色彩などの装飾の面で変化が生じるならば、人物描写が大きく変化したアマルナ時代においても、棺の特徴に変化が起きているのではないかと考えている。ここではプレアマルナ時代からポストアマルナ時代の棺の変遷について検討し、アマルナ時代の棺の特徴について考察を行っていく。また、壁画の変遷についても取りあげる。棺の美術様式を明らかにするために、壁画に見られる美術様式について検討することも有効であると考えからである。ここから、アマルナ時代の前後で棺の特徴に変化が起こった要因を検証することを試みたい。

2 新王国時代の棺の変遷——棺の形態と色彩に基づいて——

新王国時代の棺の変遷については、すでにテイラー氏やニウィンスキー氏 (A. Niwinski) などが研究を行っている。本稿では、第 18 王朝から第 20 王朝までの棺を考察の対象とした。第 18 王朝から第 20 王朝の範囲内で、新王国時代以降に登場する棺の各タイプが確立しており、末期王朝時代の棺は明確な統一性をもっていないと考えるからである。

新王国時代の棺は 3 つに分類されている。その分類の基準となるものが、①棺の形態、つまり長方形棺であるか人型棺であるか、②棺の下地に塗られる色の違い、この 2 点である。この基準に基づき、棺はホワイトタイプ、ブラックタイプ、イエロータイプに分類される。

ホワイトタイプの棺は、第 18 王朝初期、ハトシェプスト治世で主流となる²。この時期は、中王国時代に主流であった長方形棺と新しい形の人型棺を併用していた。時代を経て人型棺が主流として使用されるようになるため、この時期は長方形棺から人型棺への移行の時期であったのであろう。鬘部分は、青または黒の単色、もしくは青と黄色のストライプ模様である³。

棺のふたには、中心に碑文の帯が描かれる。ふたの中央の碑文から、棺本体部分へ向かって何本かの碑文の帯が水平に伸びている。これにより碑文の帯に囲まれた長方形の区画がいくつかでき、そこに人物や神々などが描かれることもある。その場合、凶像はミイラの運搬や泣き女など、様々なレパートリーが存在し、中王国時代の長方形棺に頻繁に描かれていたウジャトの描写も見られる。

棺には碑文に囲まれた区画がいくつかあり、装飾されている部分よりも空白のまま残される区画が多い。棺のふたに至っては、その区画に装飾をもつ棺は見られない。また、人型棺のふたでは、胸の上に交差した腕を描いたものがわずかに見られるが一般的ではなかった。ふたへの腕の描写の有無は、棺の年代同定の手段の一つとなりうると、グラジェツキー氏 (W. Grajetzki) は述べている⁴。

ブラックタイプの棺は、トトメス 3 世治世から、その使用が中心となる⁵。このタイプの棺は、テーベ、サッカラ、ダハシュール、アコリス、ヌビアのエジプト人共同墓地に至るまで、広い範囲での使用が確認される。

2 A. Niwinski, "Sarg NR-SpZt," *Lexikon der Ägyptologie* V (1984), p.437; J. H. Taylor, "Patterns of Colouring," p.167.

3 J. H. Taylor, *op.cit.*, p.167.

4 W. Grajetzki, "Ein Sargtyp des Neuen Reiches und sein möglicher Ursprung in der Amarnazeit," *Göttinger Miszellen* 150 (1996), 67.

5 A. Niwinski, *op.cit.*, p.438; J. H. Taylor, *op.cit.*, p.169.

筆者が知る限りでは、このタイプの最も早い例はアメンエムオベ (Amenemope) のものである⁶。棺の下地が黒色で塗られており、鬘部分は黒色と金色、もしくは黄色のストライプ模様である。ブラックタイプの棺に見られる装飾は、ホワイトタイプの棺の特徴と類似している。碑文の帯に囲まれた区画は空白が多く、棺のふたに至っては人物などの装飾をしないことが一般的である。ブラックタイプが主流となるこの時期には、長方形棺の使用は見られなくなり、ほとんどが人型棺である。ただし、複数の入れ子状の棺セットを用意する場合においては、一番外側の棺は長方形の形で制作される。

ブラックタイプからイエロータイプへ棺の特徴が変化する間に、アマルナ時代が存在する。テイラー氏は、アマルナで発見されたミニチュアの棺を根拠にして、棺の特徴においては大きな変化は見られないと述べている⁷。

筆者が知る限りではアマルナ時代の棺と断定できる原形を保つ棺は見つかっておらず、また先行研究においてもアマルナ時代の棺の例は、このミニチュアの棺の一つである。そのため、この時代の棺には大きな変化が見られないと断定するには、まだ史料が少ない。確かにアマルナ時代のミニチュアの棺の例はあるが、これが遺体を納める棺と同様の特徴をもつかどうかは確実ではない。なぜなら、イエロータイプの棺を持つ被葬者が所有するミニチュアの棺は、碑文のみの装飾を施しているものが多く、イエロータイプとは異なる簡素な装飾をもっていることが多いためである。

壁画や彫像などに明らかなように、アマルナ時代では美術様式が変化しており、このことから棺においても同様に美術様式の変化があったと考えられるのではないであろうか。

イエロータイプは、第19王朝から顕著に見られるようになる⁸。ホワイトタイプとブラックタイプの棺と異なり、イエロータイプの棺のふたには、豊富な装飾が施され、空白を埋めるように変化している。またその装飾は、黄色、青色、赤色、緑色など多くの色を使用しており鮮やかである。ふたには、人物の腕が交差、あるいは伸ばした状態で描写されることが一般的になった。

新たな特徴として、この時代は二重になった鬘が流行している⁹。また、イエロータイプの棺では、そのふたに衣服を着た人物を描くようになった。このような、死者に衣服を着せ、生前の姿で描いた棺は着衣型¹⁰と呼ばれる。この着衣型の描写は、石棺の場合はそのふたに、木棺では入れ子状の内側の棺、もしくはミイラボードに表現される。

以上が新王国時代の棺であるホワイトタイプ、ブラックタイプ、イエロータイプの棺の特徴である。新王国時代初期、トトメス3世治世、第19王朝と、棺は変遷を遂げてきたのである。ホワイトタイプ、ブラックタイプ、イエロータイプの変化をたどっていくと、簡素なブラックタイプから、豊富な装飾をもつイエロータイプへの突如の変化は極端であった。先行研究では、この極端な変化の要因については触れられておらず、両者の間にあるアマルナ時代の棺に、大きな変化は見られなかったと考えられている。

しかし、そうであるならば、突如、イエロータイプのように豊富な装飾をもつ棺が登場するであろうか。アマルナ時代に入るまでに使用されてきた棺では、イエロータイプのように、ふたにまで細かな装飾を施し

6 アメンエムオベの棺の碑文には、“Chief Carrier of Arms of Thutmose I”(トトメス1世の武器運搬者の監督官)という称号が刻まれている。A.Eggebrecht, *Pelizaeus-Museum Hildesheim: Die Ägyptische Sammlung* (Mainz, 1993), p.42. 先行研究でテイラー氏は、アメンエムオベの棺の年代は確実ではないと述べ、ブラックタイプの初期の例はハトシェプスト治世のハトネフェル (Hatnefer) のものであると述べている。J. H. Taylor, *Egyptian Coffins* (London, 1989), p.34.

7 J. H. Taylor, “Patterns of Colouring,” p.169. オシリス神など神々の姿は描かれていないが、棺の形態は伝統的であると述べている。

8 A. Niwinski, *op.cit.*, pp.439-440; J. H. Taylor, *op.cit.*, p.169.

9 J. H. Taylor, *op.cit.*, p.170.

10 西坂朗子、「新王国時代の石棺研究に関する諸問題」、『エジプト学研究』第8号(2000年)、124頁。

ている棺は見られない。先に見たように、イエロータイプの棺には多くの新しい要素が登場しているのである。

このようなブラックタイプからイエロータイプへの極端な変化の要因を明らかにするために、「3 人物の表現様式の変遷——人物スタイルと衣服に基づいて——」で、棺に描かれる人物の変化について述べる。人物描写の変化を取りあげる理由として、ブラックタイプからイエロータイプへの変化はアマルナ時代に起因するものではないかと考えるためである。

伝統的な美術様式とアマルナ時代の美術様式を比較し、目に見えて大きな変化が生じている点が人物の描写様式である。人物描写について考察することで、伝統的な美術様式からアマルナ時代の美術様式へ変遷したことに応じて、棺の装飾にも影響を与えたことが明らかになるであろう。

3 人物の表現様式の変遷——人物スタイルと衣服に基づいて——

ここでは、棺に描かれる人物の表現様式の変遷について考察を行う。人物の描かれ方に着目することによって、ブラックタイプからイエロータイプへの棺の変化の要因がアマルナ時代にあるという可能性を示したい。

先行研究では、棺はその形態と色彩の違いに基づいて分類されており、そこに描かれる人物や神々の姿については注目されてこなかった。棺の形態や色彩における変化は、美術様式の変化を示すものであり、描かれる人物や神々の描写もその影響を受けていると仮定できるであろう。そのため、人物の表現様式の変遷も棺の年代同定の手段の一つとなりうると考える。棺の変遷研究では、棺の形態と色彩の変化と、人物の描かれ方の変化を一体的に検討すべきであると考えている。

・人物スタイルの変化

人物の表現様式の変遷については、人物のスタイルと衣服の変化を示す。人物スタイルの変遷を表すために、本稿ではロビンズ氏 (G. Robins) のグリッドシステム¹¹を用いた。衣服の変遷については、新王国時代の壁画や棺に描かれる衣服をトレースし、年代順に列挙したものを資料1にあげている。

グリッドシステムとは、ロビンズ氏が、壁画に残存するグリッド痕をもとに人物スタイルの特徴を示したものである。人物スタイルでポイントとなる点が、①ひざの皿上、②臀部下、③腹部、④背中の最も幅が狭い部分、⑤肩、⑥鼻、⑦髪のはえぎわ、以上7点を通る水平ラインである。足裏のラインを0（ゼロ）とし、髪のはえぎわラインまでが、彼女が示すグリッドシステムにおける範囲である。このラインの変化が人物スタイルの変化へ繋がる。

グリッド痕が無いものについては仮定のグリッドを使用している¹²。中王国時代以降の人物描写において、人物のひざの皿上は6番目の水平ラインを通るため、そこから1グリッドの大きさを割り出し、全体のグリッドを作成したものである。

ロビンズ氏のグリッドシステムに基づくと、新王国時代では、①新王国時代初期の人物スタイル、②トトメス3世治世の人物スタイル、③アマルナ時代の人物スタイルと、3つの人物スタイルが存在していた。残念ながら、彼女の研究対象は壁画であり、棺に描かれる人物スタイルについては分析を行っていない。ただし、彫像のスタイルも、同時期の壁画に描かれる人物と同じスタイルをとることを示している¹³。このことから、筆者は、棺に描かれる人物スタイルについても、壁画に描かれる人物スタイルと同様の変化が生じていると考えている。

11 G. Robins, *Proportion and Style in Ancient Egyptian Art* (London, 1994), p.60.

12 *Ibid.*, p.61.

13 *Ibid.*, p.148.

以下では、ロビンズ氏のグリッドシステムを用いて分析した、棺に描かれる人物のスタイルの特徴について述べる。

新王国時代の初期の人物スタイル (Fig. 1) は、中王国時代から使用されてきた人物スタイルと同様である¹⁴。例えば、ホワイトタイプに分類されるネブセニイの棺では、足裏から髪のはえぎわのラインまでが 18 グリッドで構成され、ひざの皿上には 6 本目の水平ラインが通っている。順に、臀部下は 9 と 2 分の 1 本目¹⁵、背中のも最も幅が狭い部分は 11 本目、肩が 15 本目、鼻が 17 本目、髪のはえぎわが 18 本目を通る。これが、中王国時代から使用され続けてきた、伝統的と呼ばれる人物スタイルである。新王国時代初期の壁画と棺に描かれる人物は、共に同じスタイルをもっている。

トトメス 3 世治世の人物スタイル (Fig. 2) では、人物スタイルに若干の変化が見られるようになる。新王国時代初期の人物スタイルと比較して異なる点は、ひざから上の部分である。従来の人物スタイルでは、臀部下は 10 本目の水平ライン付近、背中最狭部は 11 本目を通ることが一般的であった。一方、トトメス 3 世治世では臀部下を通る水平ラインは 9 へ下がり、背中最狭部は 12 本目へと 1 つ上に上昇した¹⁶。つまり、中王国時代から続く伝統的な人物スタイルと比べ、トトメス 3 世治世の人物スタイルは、臀部下から背中までの胴部が長く描かれるように変化し、短足に見える傾向があった。

アマルナ時代の人物スタイル (Fig. 3) の、特徴的な丸みをおびた身体的特徴は、アメンヘテプ 3 世治世 30 年以降から徐々に見られるようになる。この時代の人物スタイルを示すために、ここではアクエンアテンの石版を参考にした。アクエンアテンの棺は破損が激しく、人物描写を判別できないためである。アマルナ時代のグリッドにおける人物スタイルの特徴は、足裏から髪のはえぎわまでを 20 グリッドで構成している点である¹⁷。従来の伝統的な表現で描かれた人物は 18 グリッドで構成されていた。この追加された 2 つ分のグリッドは、首と胴部に加えられている。高官の墓の壁画においても、人物は 20 グリッドを当てはめたスタイルで描かれている¹⁸。このことから、アマルナ時代に特徴的なこの人物スタイルは、ファラオのものではなかったことがわかる。

第 19 王朝では、新王国時代初期に使用していた人物スタイルを再び取り入れている。ただし、アマルナ時代終焉後から第 19 王朝に入るまでの間、アマルナ時代の人物スタイルと伝統的な人物スタイルとの混乱が見られる。トゥトゥアंकアモンやアイ、ホルムヘブ、ラムセス 1 世の建造物では、18 グリッドを使用しつつも、丸みを帯びた身体や短足の表現がいくつか見られるとロビンズ氏は述べている¹⁹。

また、20 グリッドの人物表現はアマルナ時代に突如出現したものではない。トトメス 4 世王墓では 20 グリッドで描かれたファラオの姿が見られる²⁰。20 グリッドで描かれてはいるが、アマルナ時代の特徴とは異なり、増加した 2 つ分のグリッドは特定の部位に加えられているわけではなく、伝統的な体つきで表現されている。

以上が、新王国時代における人物スタイルの特徴である。新王国時代初期の人物スタイルは中王国時代から見られるスタイルで表現されており、次に、そこに若干の変化が加わったトトメス 3 世治世の人物スタイルが登場した。アマルナ時代の人物スタイルは、前者 2 つのスタイルとは異なり独特な表現様式を持つが、20 グリッドで構成される人物スタイルはトトメス 4 世墓でも見られた。

14 *Ibid.*, p.87, and p.254.

15 この時代のスタイルでは、臀部下は 10 本目のラインを通ることが一般的。

16 *Ibid.*, p.87.

17 *Ibid.*, p.123.

18 *Ibid.*, p.139.

19 *Ibid.*, p.157.

20 *Ibid.*, p.133.

・衣服の変遷

人物スタイルが変化するならば、人物が身につける衣服にも同様の変化が起こったと考えられる。そこで筆者は、新王国時代の壁画や棺に描かれる衣服の描写をトレースし収集した(資料1)。衣服の描写はバリエーションが多いため、時代ごとの分類は難しく、古典的な衣服の描写は消えずに存在し続けているが、唯一大きな変化がアマルナ時代の前後の時代に見られる。

本稿で考察対象とする衣服は、男性の衣服であるキルトである²¹。キルトは、神、ファラオ、高官、労働者など、様々な社会階層の人々によって身につけられており比較対象となる資料が多いからである。以下では、①アマルナ時代前の新王国時代のキルト、②アマルナ時代以降のキルト、に分類してその特徴を示すこととする。

アマルナ時代前のキルトは、新王国時代の始まりからアメンヘテプ2世治世まで、衣服の描写に大きな変化は見られない。古王国時代から使用され続けてきた、シンプルな巻きつけ式のキルトが主流である(Fig. 4)。キルトは台形の形が一般的であるが、いくつかのバリエーションが見られる。例えば、Fig. 4とFig. 5は形は異なるが、布を巻いてそれを腰帯で留める点では同じである。ホワイトタイプとブラックタイプの棺に描かれる人物は、この巻きつけ式のキルトを着用して描かれている。

トトメス4世、アメンヘテプ3世の治世には、さらにバリエーションが増加し、幅が太い腰帯をもつ巻きつけ式のキルトや細かなプリーツが施されたキルト(Fig. 6)の描写が新たに見られるようになる。幅の太い腰帯は、巻きつけ式のキルトと共に着用され、その際、結び目の描写が徐々に見られるようになる。それまでの、巻きつけ式のキルトの描写では、このような腰帯の結び目の表現は見られない。このことから、トトメス4世からアメンヘテプ3世の治世にキルトの着用方法が変化した、あるいは、美術様式が変化したことが考えられる。

この時代では、細かなプリーツをもつキルトの描写は多くは見られないが、この特徴をもつキルトの描写は、アメンヘテプ3世からアクエンアテン治世にかけて増加していく。巻きつけ式のシンプルなキルトから、プリーツのあるキルトへの移行は、この時代のエジプト全域で起こった表現様式の変化であると、フォーゲルザング・イーストウッド氏(G. Vogelsang-Eastwood)は述べている²²。そしてプリーツをもつキルトの表現は、アマルナ時代で一般化していく。

アマルナ時代以降では、プリーツのあるキルトの描写が多く見られる。これはファラオのみならず、私人においても同様である。アマルナ時代のジェフウティメスの棺(Fig. 8)や、ポストアマルナ時代のイニウイアの石棺などでも、このキルトの描写が見られる。イニウイアの石棺のふたは着衣型の表現であり、彼が着用している衣服が、プリーツのあるキルトである。この時期、巻きつけ式のキルトの描写の数は明らかに減少している。このことから、アクエンアテン治世において、プリーツのあるキルトの表現が定着したと筆者は考えている。アクエンアテン治世終焉後も、プリーツのあるキルトの描写は、引き続き主流として使用される。

第19王朝に入った後も、キルトの描写は、伝統的に使用してきた巻きつけ式のシンプルなキルトへ完全には戻らなかった。むしろアマルナ時代に定着したと思われるプリーツのあるキルトの表現が、なお主流で

21 フォーゲルザング・イーストウッド氏(G. Vogelsang-Eastwood)の研究では、男性が身につける腰巻は、Loincloth(腰巻、下帯)、Apron(前掛け)、Kilt(腰巻)、Skirt(スカート)と名称が分けられている。古王国時代では、LoinclothやApronは細い带状であり、それは腰や臀部周りを全く覆っていない。しかし、徐々に、Loincloth、Apron、Kilt、Skirtに分類されるどの衣服も、1枚(もしくは2枚)の布を腰に巻きつけて着用するようになる。衣服の機能としては同じであると筆者は考えるため、本稿では、腰に巻いて着る衣服は「キルト」と総称することとする。

22 G. Vogelsang-Eastwood, *Pharaonic Egyptian Clothing, Studies in Textile and Costume History* (Leiden, 1993), p.62.

あった。例えば、ラムセス2世治世の、サムト墓、ネフェルレンペト墓、センネジェム墓において、そこに描かれる衣服のほとんどがプリーツがあり、かつ膝下の長さをもつキルトである（資料1）。巻きつけ式のキルトの描写も確認されるが、比較的数は少ない²³。

棺に関しても同様である。第19王朝以降のイエロータイプの棺に描かれる人物は、プリーツのある衣服を着て描かれている。巻きつけ式のキルトも併用しているが、プリーツのあるキルトの表現はイエロータイプの棺で見られる新たな描写である。ホワイトタイプとブラックタイプの棺からは、この衣服の描写は見られない。以上のことから、アマルナ時代に主流の衣服として定着したプリーツのあるキルトが、第19王朝以降でも主流な衣服として使用され続けていたと筆者は考えている。

以上、衣服の変遷では、トトメス4世とアメンヘテプ3世治世頃から見られ始めたプリーツのあるキルトは、アマルナ時代で定着し、第19王朝に入ってもなお使用され続けていたことが判明した。人物スタイルでも、アマルナ時代の丸みを帯びた人物スタイルは、ポストアマルナ時代においても確認されていることから、アマルナ時代に定着した人物スタイルや衣服の表現様式はアマルナ時代で途切れず、後の時代の美術様式に影響を与えていることが考えられる。

これまで考察してきたことから、アマルナ時代の棺の特徴が、後の棺に影響を及ぼしたと考えるのが自然である。アマルナ時代の棺は、イエロータイプへの変化の過程の中にある棺であるにとらえる必要があると筆者は考えている。

4 ブラックタイプからイエロータイプへの変化の過程

ここではまず、「2 新王国時代の棺の変遷——棺の形態と色彩に基づいて——」で示した形態と色彩に基づく棺の変遷と、「3 人物の表現様式の変遷——人物スタイルと衣服に基づいて——」での人物の表現様式の推移を相互に対応させ、棺のタイプが変化するに伴い、人物スタイルも同時期に変化していることを示す。このことは、新たな人物スタイルが生じたアマルナ時代には、棺の装飾においても、新たな特徴が現れる可能性があることを意味している。ここでは、ブラックタイプの棺からイエロータイプの棺への変化の要因が、その間に位置するアマルナ時代にあるのではないかという観点から考察していく。

棺のタイプの変化の時期と人物スタイルが平行して変化することをふまえ、次に、アマルナ時代の棺の特徴について、プレアマルナ時代からポストアマルナ時代の棺の変遷のなかで明らかにしていく。ここでは、アマルナ時代の美術様式からイエロータイプの棺へと繋がる要素を示していきたい。

また、プレアマルナ時代からポストアマルナ時代の美術様式の変遷を、より明確にするために、壁画における美術様式の変遷を明らかにする。筆者が知る限りではアマルナ時代に属する原形を保つ棺が現存していないため、壁画からも美術様式を読み取ることが必要であろう。

(1) 棺の形態と色彩における変化と人物スタイルの変化

棺の形態と色彩における変遷と、人物描写の変遷の対応関係を見ていきたい。ホワイトタイプの棺が主流であるハトシェプスト治世には、新王国時代初期の人物スタイルが取られていた。この時代は、棺のデザインや構成と人物スタイルは共に中王国時代の流れをくむものであった。

次に主流の棺がブラックタイプへと変化したトトメス3世治世には、人物スタイルもトトメス3世治世の人物スタイルへと変化している。つまり、このトトメス3世治世では棺の形態において中王国時代の特徴は消え、新たな特徴をもつようになった。人物スタイルに関しても、中王国時代から使用されていたもので

23 礼拝時は、巻きつけ式のキルトを着用していることが多い。

はなく、この時代独自の人物スタイルが発生したのである。

イエロータイプが主流となった第 19 王朝では、人物スタイルはアマルナ時代の人物スタイルから、新王国時代初期の人物スタイルへ回帰している。ポストアマルナの期間内において、人物スタイルは徐々に新王国時代初期に見られる伝統的な人物スタイルへと戻っていった。そしてこのスタイルが定着した第 19 王朝に、イエロータイプの棺が主流となり始めたのである。

以上述べたように、人物スタイルが変化する時期と同時に、棺の形態や色彩の面でも、棺の特徴が変化していることは明らかである。これをふまえると、人物スタイルが大きく変化したアマルナ時代においても同様に、棺の形態や色彩などの面でも変化が生じていたのではないかと推測できる。

つまり、棺の変遷において、ホワイトタイプの棺には中王国時代から使用される新王国時代初期の人物スタイルが、ブラックタイプの棺にはトトメス 3 世治世の人物スタイルが、アマルナ時代の棺にはアマルナ時代の特異な人物スタイルが、イエロータイプの棺には中王国時代からの伝統的な人物スタイルが対応する関係があるのではないかと筆者は考えている。アマルナ時代には、アマルナタイプと呼べるような新たな特徴をもつ棺が登場していたのではないであろうか。

そこで次に、棺に関して変化が起こったと考えられるアマルナ時代の棺と、その前後の時代の棺の特徴を比較し、アマルナ時代の美術様式からイエロータイプの棺へと繋がる要素を明らかにしていく。

(2) プレアマルナ時代からポストアマルナ時代までの棺

ここでは、プレアマルナ時代からポストアマルナ時代の間、棺の特徴がどのように変化していったのかを明らかにすることによって、イエロータイプの棺の特徴への繋がりを示したい。

・ ティの棺 (プレアマルナ時代) Fig. 7

イエロータイプの例として、プレアマルナ時代にさかのぼるティの棺をあげる。これはアメンヘテプ 3 世治世 30 年以降のものであると考えられている²⁴。全体を黄色で塗られており、装飾は、黄色、青色、赤色、黒色、白色と様々な色で装飾を施している。

ところが、装飾の構成についてはブラックタイプに類似している。ふたに描かれる碑文の帯に囲まれた区画は空白が多いためである。上部の一部の区画に大きくアヌビス神が描かれているが、イエロータイプに特徴的な繊細な装飾ではない。また、イエロータイプの棺では、二重の鬘が一般的な表現であるが、ティの棺の鬘はストライプ模様である。この鬘は、ブラックタイプで使用していた様式である。他にも、イエロータイプの棺では、胸の上で腕を交差する描写が見られることが通例であるが、ティの棺には腕の描写はなく、この点においてもブラックタイプの棺の形態と類似する。ティの棺は、一見するとイエロータイプの棺と見られるが、様々な点でブラックタイプの棺の特徴と類似しているのである。加えて、ティの人型棺を納めていた外棺はブラックタイプの装飾をもっていることがわかっている。

以上のことから、ティの棺はブラックタイプからイエロータイプへの変遷の間に位置する棺であり、イエロータイプの先駆けとなる棺であると考えられる。つまり、アマルナ時代に入る前の時代において、黄色の下地をもつ簡素な装飾の棺 (ティの棺) が登場していた。そしてアマルナ時代をはさみ第 19 王朝を迎えたとき、ふたにまで空白がないように細部まで装飾するイエロータイプの棺が現れたのである。

このことから筆者は、棺のふたに見られる、装飾の密度における移行期はアマルナ時代にあると考えている。つまり、プレアマルナ時代の時点では、棺のふたの装飾は簡素であり、アマルナ時代でふたへ細かく装

24 A. Dodson, "The Late Eighteenth Dynasty Necropolis at Deir el-Medina and the Earliest 'Yellow' Coffin of the New Kingdom," *Deir el-Medina in the Third Millennium AD* (Leiden, 2000), p.97.

飾を施すようになるのである。そして時代が経ていくにつれて、人物などの装飾がますます密集して描かれるようになり、イエロータイプの棺が登場するのではないであろうか。

以上のことから、このテティの棺の例は、アマルナ時代において棺に多くの装飾を施す様式ができ、それが後の時代の棺（イエロータイプ）に伝わった可能性を示すものであろう。

・ジェフウティメスの棺（アマルナ時代） Fig. 8

アマルナ時代の棺であると報告されているジェフウティメスの棺は、ストラズブール博物館に所蔵されている²⁵。この棺はアマルナ時代に使用され、後のポストアマルナ時代にジェフウティメスによって再利用されている。ジェフウティメスの棺は、図にあげた3点の破片が現存するのみである。

この破片は、人型棺のふたの一部であると報告されている²⁶。3つのうちの下の破片では両脇に碑文が見られることから、これは碑文の帯に囲まれた区画であると考えられる。伝統的な描写とは違い、人物は丸みのある身体つきで描かれていることから、明らかにアマルナ様式で描かれていることがわかる。衣服は、アマルナ時代に定着したと思われるプリーツのある長いキルトを全員が着用している。

ホワイトタイプやブラックタイプの棺と、イエロータイプの棺を比較して、もっとも特徴が異なる点が棺のふたであると筆者は考えている。ホワイトタイプとブラックタイプの棺のふたでは、碑文の帯に囲まれた長方形の区画の多くが空白のまま残されている。一方で、イエロータイプの棺では、ふたも含み細部まで装飾を施している。そして、アマルナ時代の棺と思われるジェフウティメスの棺では、碑文に囲まれた区画にほぼ空白がないよう人物が描かれていることがわかる。以上のことから、棺のふたにまで細かく装飾する様式が、このアマルナ時代の時期に確立していたのではないかと考えている。

・トゥトゥアंकアモンの厨子（ポストアマルナ時代）

次にポストアマルナ時代の棺に注目する。トゥトゥアंकアモンの厨子では、側面や天井部分と細部に至るまで人物や神々を装飾している点、またペル・ウル型と呼ばれるその形態は、イエロータイプの外棺にも見られる特徴である。つまり、少なくともポストアマルナ時代の美術様式は、イエロータイプの棺に取り入れられている。このことから、イエロータイプの棺の特徴につながる美術様式は、第19王朝の前、つまりアマルナ時代からポストアマルナ時代の間には確立されたと筆者は考える。

また、第19王朝の棺に特徴的な着衣型は、ポストアマルナ時代からすでに存在していた。保存状態の良い例が、イニウイアの石棺である。棺のふたでは、被葬者がプリーツのある衣服を着た姿で表現されており、鬘は第19王朝に流行した二重の鬘である。イニウイアの墓の壁画は多色で装飾されており、そこに描かれた彼の2人の息子たちがアテン神殿の財務書記官の称号をもっていることから、彼の墓の年代はポストアマルナ時代のものであると考えられている。

これら3つの棺の特徴をふまえ、アマルナ時代からポストアマルナ時代の間には、棺のふたにまで装飾を施す様式が確立していたと筆者は考えている。この時代に定着した様式が、後のイエロータイプへと繋がっていると考えられるのではないであろうか。次に、このアマルナ時代の美術様式の変遷を、壁画装飾の面からも明確にしていきたい。

25 M. Guentch-Ogloueff, "Fragments de Sarcophage du Temps d'Akhenaton," *Revue d'Égyptologie* 4 (1940), 75.

26 *Ibid.*, 75.

(3) 墓の壁画における第 18 王朝後期から第 19 王朝の美術様式の変遷

棺の特徴が変化する要因の一つとして、当時の制作を担当した絵師に変化が起こったと考えられる。クーニー氏 (K. Cooney) は、壁画を手がける絵師の称号をもつ人物が、木棺などの副葬品の装飾も行っていたと述べている²⁷。このことから、棺の美術様式が変化するとき、壁画においても同様に変化が生じていると想定される。そのため、棺の特徴がアマルナ時代前後で変化を遂げた要因が、壁画からも考察できると考えている。

ドッドソン氏 (A. Dodson) とバルベル氏 (D. Valbelle) は、王家の谷の王墓の装飾の変遷を根拠に、第 18 王朝後期から第 19 王朝以降の絵師に変化があったのではないかと指摘している²⁸。彼らは、まずトトメス 3 世とアメンヘテプ 2 世王墓について取りあげている。この 2 人のファラオの王墓は、主に黒色のインクで人物などが描かれており、簡素な印象を受ける装飾である。

次のトトメス 4 世とアメンヘテプ 3 世の王墓では、多色の装飾が行われるように変化した。そしてポストアマルナ時代のホルムヘブ王墓においては、一部ではあるが、壁画ではなく彩色レリーフが制作されていると述べられている²⁹。第 19 王朝初期のセティ 1 世王墓では、王墓の壁の全てが彩色レリーフで装飾されるようになった。以上のことからわかるように、アマルナ時代後では、王墓の壁画装飾にエネルギーをかける傾向が見られる。

つまり、トトメス 4 世とアメンヘテプ 3 世時代が、新王国時代の王墓における第 1 の変化の時期であると言えるであろう。この時代は、簡素な装飾から、後の色鮮やかな王墓へと発展していく移行期にある。そしてアマルナ時代をはさみ、ポストアマルナ時代のホルムヘブ王墓では彩色レリーフが採用されるようになることが、第 2 の変化である。彩色レリーフは壁画に比べ、より高度な技術と労力が必要であると思われる。このことから、アマルナ時代からホルムヘブ治世までには、美術に関する技術が発展していたことがうかがえる。

王墓の壁画装飾の変遷に着目すると、時代を経るにつれて、装飾にますますエネルギーをかけていることがわかる。このことから、ドッドソン氏とバルベル氏は、アメンヘテプ 3 世治世ごろから、埋葬品に関わる絵師や彫刻師などの職人たちが増えていった可能性を指摘している³⁰。

ここで、壁画の装飾の変化と棺の装飾の変化の時期は、ほぼ一致することを示しておきたい。アメンヘテプ 3 世治世に、簡素ではあるが多色で装飾が施されたテティの棺が登場している。そしてこの時代から第 19 王朝に向けて、棺への装飾はますます繊細で鮮やかになっていく。絵師や彫刻師が増えたことが、棺の装飾にも影響を及ぼし、細かな装飾が施されるイエロータイプの棺の登場を可能にしたと考える。

また、アメンヘテプ 3 世治世の絵師について興味深い研究が、コズロフ氏 (A. P. Kozloff) とヘルトウィグ氏 (M. K. Hartwig) によって行われている。彼らはアメンヘテプ 3 世時代のテーベ墓を考察し、2 つの絵師集団が存在したと述べている³¹。

27 K. Cooney, *The Value of Private Funerary Art in the Ramesside Period in Egypt* (Baltimore, 2003), pp. 235-237.

28 A. Dodson, *op.cit.*, p.100; D. Valbelle, *Les Ouvriers de la Tombe: Deir el-Médineh à l'Époque Ramesside* (Caire, 1985), pp.25-26.

29 D. Valbelle, *op.cit.*, p.24.

30 A. Dodson, *op.cit.*, p.100; D. Valbelle, *op.cit.*, p.26.

31 M. K. Hartwig, *Tomb Painting and Identity in Ancient Thebes, 1419-1372 BCE* (Turnhout, 2004), p.32; A. P. Kozloff, "Theben Tomb Paintings from the Reign of Amenhotep III: Problems in Iconography and Chronology," *The Art of Amenhotep III: Art Historical Analysis Papers Presented at the International Symposium Held at the Cleveland Museum of Art Cleveland, Ohio, 20-21 November 1987* (Cleveland, 1990), p.63.

墓の装飾は、配色や輪郭線、絵の構成と空白の組成、描かれるテーマなどによって分類される³²。これに基づき、一つがカルナクのアメン神殿に属する絵師集団、もう一つがマルカタ王宮に属する絵師集団に分けられる。前者は、単色で細部まで装飾を描かない様式、もしくは彩色の際は、青や緑など寒色系の色彩を主に使用する。後者は、豊富な色と鮮やかな装飾が特徴的であり、赤や黄色など目に鮮やかな暖色系の色彩が中心である。本稿では、アメン神殿に属する絵師集団の装飾を「神殿スタイル」、マルカタ王宮に属する絵師集団の装飾を「王宮スタイル」と呼ぶ³³。

神殿スタイルの簡素な印象を受ける墓は、宗教関係の仕事に携わる人物のものであることが多いことがわかっている³⁴。一方で、王宮スタイルの色鮮やかな墓は、アメンヘテプ3世に仕える、軍政、民政、王宮、地方行政に携わる人物の墓であった³⁵。つまり、アメン宗教に関係が深い場合は簡素な装飾が行われる傾向にあり、一方、マルカタ王宮、すなわちアメンヘテプ3世に近い人物は、多色で華やかな装飾を好む傾向にあったことがわかる。

アメンヘテプ3世治世において、アメン神官団の勢力はますます増大していった。そのため、この時代にアメンヘテプ3世によるアメン神官団からの脱却の意図が見られ、それが後のアクエンアテンの宗教改革に繋がっていると考える研究者は少なくない。このことをふまえると、アメンヘテプ3世の時代から、多色で細部まで装飾を施す王宮スタイルの様式が多く見られるようになることは不思議なことではない。アメン宗教と関連が深いことを思わせる装飾を好まず、ファラオ自身と関連が深い多色で華やかな装飾を取り入れたのではないであろうか。

これが、アメンヘテプ3世治世以降では、埋葬に関するものに多色で鮮やかな装飾を施するようになった要因の一つである可能性が考えられる。次のアクエンアテン治世では、アテン神以外の神々の礼拝を禁止していたことから、アメン神に関わりの深い簡素な装飾は取り入れられないであろう。そのため、華やかな装飾様式が引き継がれ、第19王朝の埋葬に関するものの美術は、棺も含め多色で豊富な装飾が主流となったのではないであろうか。

以上、ブラックタイプの棺からイエロータイプの棺への変化の要因がアマルナ時代にあると考えて考察を行ってきた。棺の形態と色彩の変化の時期と、人物の表現様式の変化の時期が一致することをふまえ、新王国時代の棺は、ホワイトタイプ、ブラックタイプ、アマルナタイプ、イエロータイプという変遷をたどっていると筆者は考えた。つまり、ブラックタイプからイエロータイプへの極端な変化の間には、このアマルナタイプの棺があり、アマルナ時代の棺が後のイエロータイプの棺へ繋がる特徴をもっていたのである。

次に、アマルナ時代の棺がどのように発展していったのかを、その前後の時代の棺と関連付けて考察した。アメンヘテプ3世治世のテティの棺はイエロータイプの棺と見られるが、装飾はブラックタイプの棺に見られるような簡素なものであった。そしてアマルナ時代をはさみ第19王朝に入ると、細部まで装飾するイエロータイプの棺が現れたのである。ジェフウティメスの棺とトウトウアムンクアモンの厨子では、豊富な装飾を施す様式が見られることから、ふたを含む細部まで装飾を施す美術様式は、テティの棺から第19王朝までの間にあるアマルナ時代に確立したと考えた。

最後に、墓の壁画に見られる美術様式の変遷についても注目した。アメンヘテプ3世治世が、壁画に多色の装飾を施す始まりの時期であり、アマルナ時代以降では壁画に豊富な装飾を施すことが一般的になっている。

32 M. K. Hartwig, *op.cit.*, pp.30-31.

33 ヘルトウィグ氏の“Temple Style”と“Court Style”による。M. K. Hartwig, *op.cit.*, pp.34-35.

34 *Ibid.*, p.34.

35 *Ibid.*, p.32, and p.35.

また、アメンヘテプ3世治世の絵師集団についての研究を取りあげ、アマルナ時代以降に豊富な装飾を施す様式が定着した要因についても示した。簡素な装飾はアメン神と関わりが深く、鮮やかな装飾はアメンヘテプ3世と関わりがあると述べられていることから、アテン神以外の神を認めなかったアマルナ時代で、多色の装飾が受け入れられることは自然なことであると筆者は考える。

5 おわりに

本稿では、新王国時代の棺の変遷を示し、ブラックタイプの棺からイエロータイプの棺への変化の要因が、その間に位置するアマルナ時代にあるのではないかとこの観点から考察を行ってきた。

「2 新王国時代の棺の変遷——棺の形態と色彩に基づいて——」では、先行研究に準拠しながら新王国時代の棺の変遷を示し、この中で、ブラックタイプの棺からイエロータイプの棺への変化が極端であることに着目した。

「3 人物の表現様式の変遷——人物スタイルと衣服に基づいて——」では、人物の表現様式の変遷から各時代の棺の特徴を示すため、人物スタイルと衣服の変化について注目した。衣服の変遷では、アマルナ時代前には、シンプルで巻きつけ式のキルトの着用が一般的であったのに対し、アマルナ時代後にはプリーツのあるキルトの描写が明らかに増加していた。人物スタイルと衣服の変遷に関する考察により、アマルナ時代は様々な面において美術様式の変換点であった。

「4 ブラックタイプからイエロータイプへの変化の過程」では、棺の形態と色彩における棺の変遷と、人物の表現様式の推移との対応に着目した。ここで両者の変化の時期が一致するため、人物スタイルが大きく変化したアマルナ時代においても、同様の変化が生じていると考えた。つまり、トトメス3世治世の人物スタイルをもつブラックタイプから、アマルナ時代の人物スタイルをもつアマルナタイプへと、棺の特徴が変化すると推測できるのではないだろうか。このアマルナタイプの棺が、後のイエロータイプの棺へ繋がる特徴をもっていると筆者は考えた。

また、壁画の美術様式の変遷についても取りあげた。アメンヘテプ3世治世から埋葬に関するものへ鮮やかな装飾を施し始めるようになり、第19王朝へ向かうにつれて、装飾にエネルギーをかけるようになっていた。

加えて、アメンヘテプ3世治世には2つの絵師集団が存在し、簡素な装飾様式はアメン神との関わりが深く、華やかな装飾様式はアメンヘテプ3世と関連があることをヘルトウィグ氏らが明らかにしている。アテン神以外の神を認めなかったアマルナ時代では、簡素な装飾様式よりも華やかな装飾様式を選択した可能性は高いであろう。アマルナ時代で鮮やかな装飾様式が取り入れられ、その様式が発展したことにより、イエロータイプの棺が誕生したと筆者は考える。

以上のことから、ブラックタイプからイエロータイプへの変化の間に位置するアマルナ時代の美術の影響が、イエロータイプの棺の発生に係る可能性を示した。イエロータイプの棺は、伝統的なブラックタイプの棺の特徴を引き継いだことにより登場した棺ではなく、むしろ美術様式が発展したアマルナ時代の要素を取り込み誕生した新しい棺であることを今回の考察で明らかにした。

本稿では、アマルナ時代の棺の特徴をある程度復元し、それに基づいて新王国時代の棺の変遷の流れをより明確にすることができたのではないかと考えている。このことは、棺の形態と色彩だけでなく、人物描写の変遷と一体的に棺を考察することで明らかになったものである。

※本稿は、2011年1月に関西大学文学研究科に提出された修士論文「古代エジプト新王国時代の棺に関する一考察——ブラックタイプからイエロータイプへの変遷——」をまとめて、加筆修正したものである。

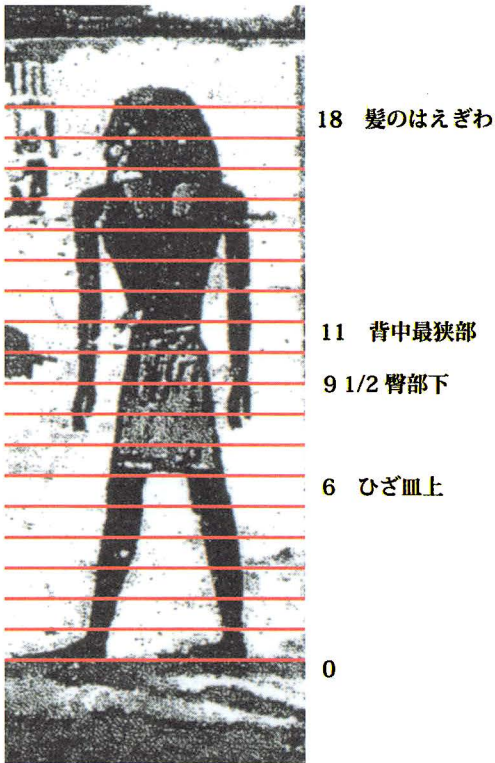


Fig. 1 新王国時代初期の人物スタイル。ホワイトタイプ、ネブセニイの棺より。G. Daressy, *Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire, Nos.61001-61044, Cerueils des Cachettes Royales*(Le Caire, 1909), Pl. XV, CG61017.

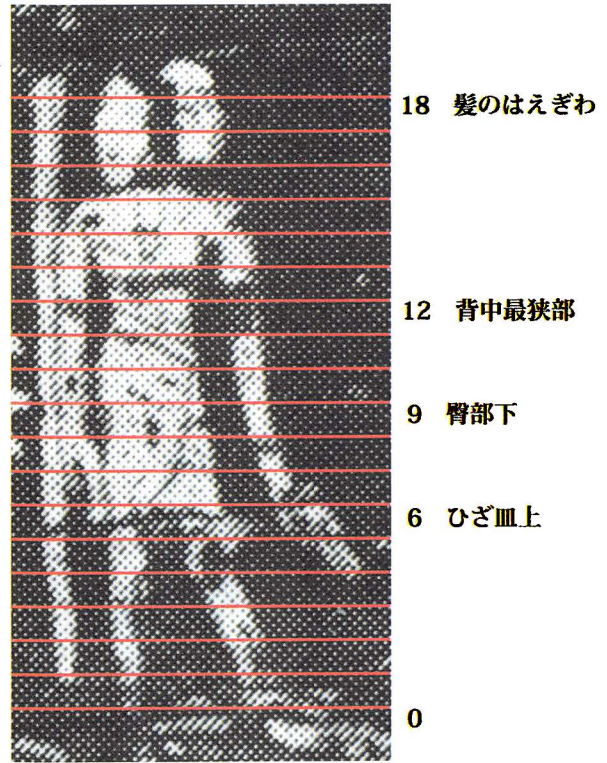


Fig. 2 トトメス3世治世の人物スタイル。ブラックタイプの棺（名前不明）より。J. H. Taylor, *Egyptian Coffins*(London, 1989), p.33, EA29580.



Fig. 3 アマルナ時代の人物スタイル。アクエンアテンの石板より。Z. Hawass, *Egyptian Museum*(Cairo, 2001), p.183.

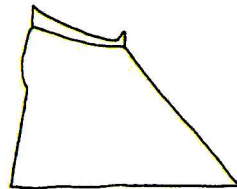


Fig. 4 巻きつけ式のキルト1。アメンヘテプ2世王墓より。G. Robins, *Proportion and Style in Ancient Egyptian Art*(London, 1994), p.88.

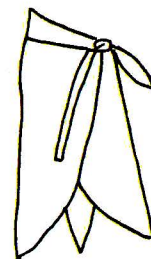


Fig. 5 巻きつけ式のキルト2。メンナの墓より。杉勇監修、『エジプトの秘宝2』（講談社、1979年）、39・40・I。



Fig. 6 プリーツのあるキルト。ジェフウティメスの棺より。M. Guentch-Ogloueff, "Fragments de Sarcophage du Temps d'Akhenaton," *Revue d'Égyptologie* 4(1940), 75.



Fig. 7 テティの棺。"The Late Eighteenth Dynasty Necropolis at Deir el-Medina and the Earliest 'Yellow' Coffin of the New Kingdom," *Deir el-Medina in the Third Millennium AD*(Leiden, 2000), Plate XIII, XV, Brooklyn Museum 37.14E.

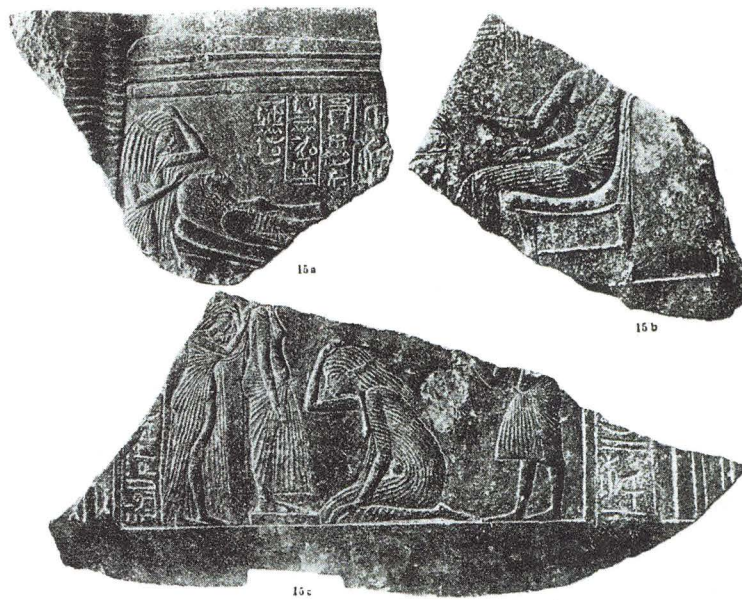
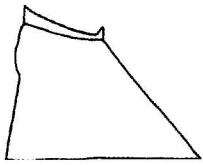


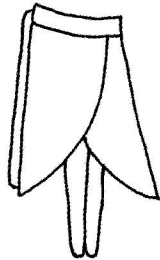
Fig. 8 ジェフウティメスの棺の破片。M. Guentch-Ogloueff, "Fragments de Sarcophage du Temps d'Akhenaton," *Revue d'Égyptologie* 4(1940), 75.

(資料1)

(アマルナ時代前)



アメンヘテプ1世
(カルナック神殿)
(Robins, 1994, p. 88.)



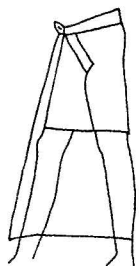
プトの従者
(ハトシェプスト葬祭殿)
(杉勇, 1979年, 8・9・I.)



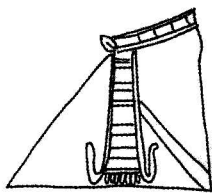
不明
(TT353)
トトメス3世治世
(Robins, 1994, p. 89.)



職人
(レクミラの墓)
トトメス3世～
アメンヘテプ2世治世
(杉勇, 1979年, 21・22・I.)



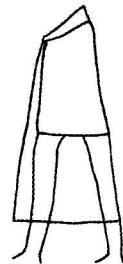
センネフェル
(センネフェル墓)
アメンヘテプ2世治世
(杉勇, 1979年, 30・32・I.)



トトメス4世
(トトメス4世墓)
(Robins, 2001, Colour Plate
14-2.)



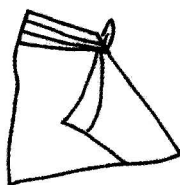
役人
(メンナの墓)
トトメス4世治世
(杉勇, 1979年, 39・40・I.)



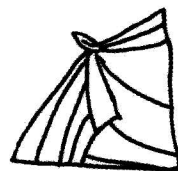
役人
(メンナの墓)
トトメス4世治世
(杉勇, 1979年, 39・40・I.)



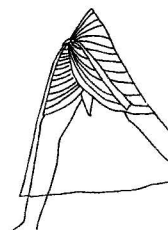
役人
(メンナの墓)
トトメス4世治世
(杉勇, 1979年, 39・40・I.)



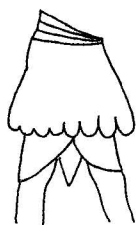
従者
(メンナの墓)
トトメス4世治世
(杉勇, 1979年, 39・40・I.)



従者
(メンナの墓)
トトメス4世治世
(杉勇, 1979年, 38・I.)



メンナ
(メンナの墓)
トトメス4世治世
(杉勇, 1979年, 38・I.)



役人
(メンナの墓)
トトメス4世治世
(杉勇, 1979年, 39・40・I.)



従者
(カエムハトの墓)
アメンヘテプ3世治世
(杉勇, 1979年, 49・50・I.)



従者
(カエムハトの墓)
アメンヘテプ3世治世
(杉勇, 1979年, 49・50・I.)



踊り手
(ケルエフの墓)
アメンヘテプ3世～4世治世
(杉勇, 1979年, 53・54・I.)

(アマルナ時代後)



ラモーセ
(ラモーセの墓)
アメンヘテプ3世～
アクエンアテン治世
(杉勇、1979年、62・I.)



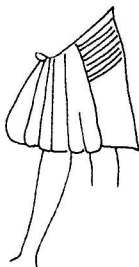
アクエンアテン
(アクエンアテン王墓)
(新規矩男、1968年、78頁。)



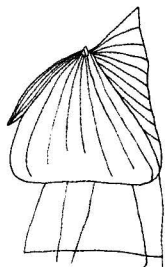
不明
(ジェフウティメスの棺)
アクエンアテン治世
(Guentch-Ogloueff, 1940, p. 75.)



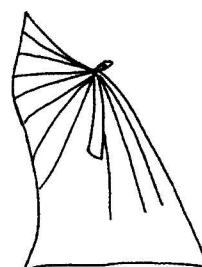
トウトウアंकアモン
(トウトウアंकアモン王墓)
(屋形禎亮、1979年、1-6・I.)



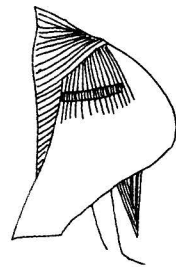
トウトウアंकアモン
(トウトウアंकアモン王墓)
(屋形禎亮、1979年、1-6・I.)



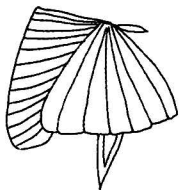
ネフェルヘテプ
(ネフェルヘテプの墓)
アイ治世
(杉勇、1979年、77・II.)



従者
(ネフェルヘテプの墓)
アイ治世
(杉勇、1979年、77・II.)



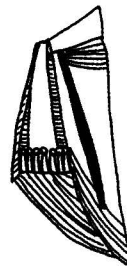
廷臣
(ホルムヘブ王墓)
(平田寛、1983年、150頁。)



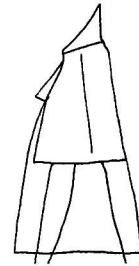
エジプト人兵士
(ホルムヘブ王墓)
(杉勇、1979年、69・I.)



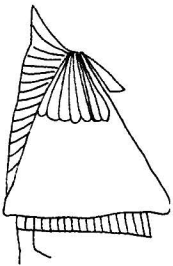
兵士
(ホルムヘブ王墓)
(杉勇、1979年、74・I.)



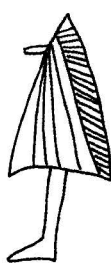
セティ1世
(セティ1世神殿)
(杉勇、1979年、85・II.)



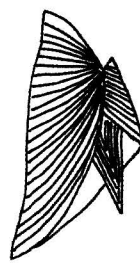
ラムセス2世
(セティ1世神殿)
(杉勇、1979年、87・II.)



書記
(サムトの墓)
ラムセス2世治世
(杉勇、1979年、104・II.)



従者
(ネフェルレンペトの墓)
ラムセス2世治世
(杉勇、1979年、105・106・II.)



センネジェム
(センネジェムの墓)
ラムセス2世治世
(杉勇、1979年、116・117・II.)



パセル
(パセルの墓)
セティ1世～ラムセス2世治世
(平田寛、1983年、106頁。)

(資料1の出典)

M. Guentch-Ogloueff, "Fragments de Sarcophage du Temps d'Akhenaton," *Revue d'Égyptologie* 4, 1940.

G. Robins, *Proportion and Style in Ancient Egyptian Art*, London, 1994.

G. Robins, "The Use of the Squared Grid as a Technical Aid for Artists in Eighteenth Dynasty Painted Theban Tombs," *Colour and Painting in Ancient Egypt*, London, 2001.

新規矩男、『エジプト美術』、講談社、1961年。

杉勇（監修）、『エジプトの秘宝2』、講談社、1979年。

平田寛（監修）、『古代のエジプト』、朝倉書店、1983年。

屋形禎亮、友部直（編集）、『エジプトの秘宝3』、講談社、1979年。